

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<書評と紹介>

出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	47
ページ	131-144
発行年	1995-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10514

〈書評と紹介〉

田中陽児・倉持俊一・和田春樹 編

『ロシア史 18世紀—19世紀 2』（世界歴史大系）

下斗米仲夫

この本は、全三巻で山川出版社から出版が予定されている、ロシア史についての、詳細で、しかも教科書的通史を目指して書かれた著作の第二巻にあたる。この本が時期的な対象とするのは十八世紀から十九世紀末にわたる時期のロシアである。つまりピョートル大帝の改革の時期から二十世紀の大事件であったロシア革命による帝国の崩壊、正確には第一次世界大戦に至る時期が、本学の倉持俊一教授を初めとして、和田春樹、土肥恒之、高田和夫、鈴木健夫、佐々木照央氏ら現在第一線の研究者によって記述されている。

現代史の中でもロシア史ほど、今世紀の変動をもっとも特徴づけるように、栄光あると同時に、また不幸な研究対象もないであろう。ロシア史家は、自己の研究対象としている地域の政治単位が消滅するという経験を、今世紀に二度も持ったわけであるからである。つまり、カーが言った現代史の開幕としての一九一七年のロシア革命と、そして一九九一年のソ連邦消滅とである。

ソ連社会主義の崩壊という事態は、同時に戦後の日本でも大きな影響を持ってきたマルクス主義の歴史観に見直しを迫っている。階級闘争と発達史観とで、国家の起源から封建制、資本主

義、そして社会主義に至るといふ壮大なビジョン自体がそのモデルとされた国で崩壊したからである。

実は評者もまた第三巻を対象とするソ連邦時代の執筆を依頼されているが、その依頼の後にソ連邦は消滅し、ロシア連邦だけでなく独立国家共同体という、あらたな国家群が生じている。

これによりロシア史の時間的、空間的範疇とはそもそも何なのか、記述の対象は伝統的な政治史や社会経済史だけでなく、社会現象や心性を含むべきなのか、といった新しい問題が生じている。たとえばロシア史の起源とは何か、マルクス主義の階級国家の出現から叙述するのではないとすれば、なぜキリスト教史観に先祖返りして、キエフ・ルーシから出発すべきなのか、問題は多い。そもそもルーシとは何であるのか必ずしもわからないが、なぜロシア史をキエフから記述しなければならないのかは、ソ連崩壊後も自明でない。ちょうど百済に日本府という存在があったからとして日本史の記述を朝鮮半島から始めるべきなのかという問題に似た提起になる。また空間面ではウクライナや中央アジアとは、そもそもロシア史講座の記述の対象なのかなど、新しい問題が生じてきた。この中央アジアの問題は、もちろん近代に入ってから併合・植民地化の問題にとどまらず、むしろタタールのくびきに見えるように、歴史家グリヨフの言うスーパード・エトノスとしてのロシアの形成ともかわっている。この課題の大きさを考えても執筆の困難さがわかる。

この点近代を対象とした第二巻が、こうした問題を含む第一巻よりも早く出たことに注目される。近代を対象とした第二巻が、

時代と空間とが比較的明確なロシア帝国を対象とするものであつて、問題はそれほど多くなかったことが幸いしたのかもしい。

こういった知的歴史的環境のなか、ソ連の歴史家から資料だけでなく方法面でもという二重の影響をこうむりがちであつた日本の歴史学者によってロシア歴史をいかに書くのかは興味あるところである。倉持、和田氏らロシア史研究会の会員は、これらの影響を受けながらも、序文にも控えめに触れられていることだが、むしろソ連史学を批判的に見つつ、独自の歴史研究のながれを形成してきた。その業績がここにちりばめられている。

もっとも問題もないわけではない。ソ連史学から相対的に自由であつたとしても、ソ連側の歴史観の問題提起から自由であつたわけでない。たとえば第九章で高田氏が論じる一九〇五年革命は、それ自体としてはよくまとまっているが、従来の十月革命史観からは重要な序章であつたとしても、和田教授が書いた八章と区別して一章を割くべき問題であつたのか、議論されるべきである。せいぜい第八章の日露戦争後の帝国の動揺でしかなかったのではないか。すべての社会運動を十月革命論の予備としてあつた伝統は再検討されねばならない。

またたとえばロシア帝国の帝国としての性格とはそもそも何なのか、レーニンの民族の牢獄という規定はよく知られてきたが、たとえばロシアとウクライナとの関係はどうか、土肥氏の優れて散文化的な執筆部分にもあまり解答がない。皇帝の統治一般でない帝国の問題は、現在のロシア政治の問題ともなっているからであ

るのだが。また民族の問題も、やや後景に退いている。ウクライナ民族とは何か、またこれと表裏の関係にあるカザークとは何かに、より詳細な記述がほしかったのはやや現在の深読みであろうか。同様、鈴木氏と佐々木氏とで重複している中央アジアの侵略・併合の部分は統一されるべきであつた。また全体として主流の政治史的記述と、社会経済史との混在的部分も気になる。マルクス主義史観により批判的であつた和田氏の記述が、もっともマルクス主義的社会構成的方法によって見えるのはやや皮肉である。

こうして本書は、史学科だけでなく、すべての学生諸君、また知識人、いなビジネスマンから主婦にいたる必携の著作である。チェチェンの民族問題にしても、またクリミア問題にしても、いなボスニア問題の理解にも有益であつて、本書の記述があつて初めて理解できるといえる。この点標準的な教科書として現在、安心して読める力作である。

（一九九四年十月刊 A5判 五二頁 五五〇〇円 山川出版社）

中野栄夫著

『コンピュータ歴史学のすすめ』

仁平 義孝

本書は、日本史研究にパソコンをいかに活用したらよいか、著

者の実践例を具体的に紹介したものである。パソコンには多様な機能があるが、ここではワープロとデータベースの二つの機能を中心に述べられている。著者が主に使っているソフトは、ワープロが『太郎』、データベースが『桐』であるので、その二つのソフトでの実践が中心となっている。まず、本書の内容を紹介しよう。

はじめは、初心者向けのオリエンテーションである。ここでは、パソコンの電源を入れてから、文書を作成・保存し、電源を切るまでの一通りの作業の流れが示されている。つぎの初級講座『入門編』では、まずパソコンとワープロ専用機の違いを述べる。データの容量、登録単語数などパソコンはワープロ専用機をはるかに超える。この点は、パソコンの大きな利点であるという。つぎに、日本史研究でのデータベース利用について。ここでは、史料目録の作成を題材にして、データベースに必要な項目、日本史の史料にみられる特殊な問題（晦日や閏月など）への著者の対処方法などが述べられている。データベースはデータの量が多いほどその機能を発揮するが、一点一点のデータの入力が大変である。その入力をいかに合理的にするか、著者が実践している入力の時間を省く方法が紹介されている。なかでも、著者独自の年コードや他のデータを参照する方法、略号による入力法などは、とても参考になる。「入力の時間を省く」とは、入力の効率をよくし、誤変換を防ぐための方法である。

中級講座『実践編』のハード編では、パソコンがどのような仕組みで動いているのか、ということが述べられている。現在、パ

ソコンを使う上で必需品となっているハードディスクを充分に使いこなすために必要な、バッチファイルやメニュー、ディレクトリなどについて詳述されている。つぎにソフト編は、日本史研究に利用する上で便利なワープロソフトとデータベースソフトについての講座である。ここでは、日本史研究という目的になったソフトを選ぶ基準が示されており、大いに参考になる。

上級講座『応用編』では、まず著者自身が使っているコンピュータの周辺機器とソフトが紹介される。つづいて辞書の一括登録・史料の印刷について。辞書の一括登録は、著者独自の年コードなど、大量に辞書登録する場合の対処方法である。また、史料の印刷では、日本史の史料にでてくる二行割書きや返り点を、どのように操作して印刷するかが具体的に紹介されている。そして後半では、リレーショナル型データベースの特性であるリレーショナル機能（データベースソフト『桐』でいう「表引き」の活用と、プログラミング（『桐』でいう「一括処理」）について述べられている。そして最後に、各自が作った史料目録などのデータベースの公開と交換の推進、歴史学研究者がいかにワープロを使い、データベースをどのように歴史研究に活かすかを考えなくてはならないことを提言している。

以上が、本書の主な内容である。つぎに本書を読んで、私が知り得たことを三つあげておこう。

一つは、ワープロ専用機の限界である。ここでの限界とは、ワープロ専用機ではこままでできないということと、逆にワープロ専用機でもこままでできる、ということである。著者も

いうように、現在のワープロ専用機はかなりパソコンに近づいているが、その機能を十分に使い切れていないというのが現実である。また、ワープロを清書用具ではなく思考用具として使うべきであるという指摘は、まったく同感である。つぎに、これは当たり前なことであるが、パソコンそのもののことを知る必要があることを痛感した。日本史研究の上でこんなことをしたいと思ったとき、それにふさわしい、それができるソフトを選ばなくてはならない。また、そのソフトを充分に活用するために必要なパソコン環境を整えなくてはならない。そのためには、コンピュータ自体のことがわかっていないと、何も整えられないのである。三つめとして、これは以前から感じていたことであるが、データベースの利便さである。たしかにデータの入力は大変であるが、入力してしまえば実に便利である。本書でも少し触れられていたが、私たちは著者の指導のもと、ある寺院の近世・近代文書をデータベース化している。現在はデータの入力もほぼ終わり、内容の整備を行なっている。この段階になると、データをソートしたり検索することによって、新たに文書の年代が比定できたり、人物比定を正すこともできる。もちろん今までの研究は、このような作業を人間の手でしてきたが、手作業よりも時間が節約され、しかも漏れがない。その上大量な文書群の中で、その作業をこなすことができるのである。そもそも入力すべきデータ、つまり史料の誤読があったならどうしようもないといわれるかもしれないが、その誤読も検索等の操作により発見されることさえある。

私は、本書の意義はつぎの二点にあると考える。第一に、研究機関などでの実践例ではなく、著者個人の実践例であること。第二に、あくまでも歴史学、なかでも日本史研究者の立場からパソコンの有効な使い方が述べられていること。この二点である。著者は、本書を刊行することによって著者自身が持っている情報・ノウハウを私たちに公開された。今度は、本書を読んだ私たちが自分の持っている情報を公開する番である。著者の主張するようにお互いの情報を公開・交換することによって、より充実したコンピュータ歴史学の方向性を探ることができよう。また、そのようにしていくなかで、著者のいう日本史データのコード化に共通したルールを作ることができ、多くの人が同じデータを共有することのできる時がくるのではないだろうか。また、本書に示された多くの実践例は、歴史学ばかりでなく、他の文系の学問分野においても大いに役立つであろう。

すでにパソコンを使っている方、そしてこれからパソコンにチャレンジしようとしている方に、是非本書を一読されることをお勧めする。

なお、本書は『ASAHIパソコン』一九九五年一月・一五日合併号（一四二号）、『EYE-COM』一九九五年二月一五日号（一一三号）などにも紹介されている。

（一九九四年十月刊 A5判 二〇九頁 二八〇〇円 名著出版）

安達 満著

『近世甲斐の治水と開発』

根崎 光男

本書は著者が本学大学院時代から取り組んできた近世甲斐地域史研究のうち、治水と開発に焦点を当ててまとめたものである。積年の成果が一書に結ばれたわけで、まずはこの刊行を素直に喜びたい。というのも、著者は研究専業ではなく、大学卒業後郷里山梨に帰って、本業のかたわら歴史学研究の問題意識を醸成してきたからである。このことは「ふるさとの農村社会のこれからの在り方に強い関心を持ち、それへの出発点として近世の村社会にも興味は持ち続けていた」という本書の「あとがき」の言葉にも示されている。そして地域が刻んだ歴史を研究へと深化させるために、大学院への遠距離通学を通して研鑽を積み、郷土史研究に新しい地平を築いてきたのである。地域密着型の論理的展開の源泉は、こうした著者の思考性のなかで培われたものである。一般の歴史研究が地域との精通が希薄なまま組み立てられるのと違って、著者は郷里が育んできた風土を膚で感得し、身をもって解き明かす特色をもっている。かといって、郷土史研究にありがちな我流に陥ることなく、その研究方法は実証性を重んじた正攻法である。本書は著者の郷土への思いを滲ませつつ、新しい歴史の構築を目指す姿勢によって貫かれている。

ところで、近世甲斐地域史研究が進められるなかで、治水や開発に関する研究がなかったわけではない。戦国期、武田信玄の領国であっただけに、その流れが近世社会をどのように規定していったかは古くからの関心事であった。ここで取り上げられた信玄堤や小切税法の研究にしても、半ば通説化した理解があった。しかし、著者自らいわれるように、「当時、山梨県の歴史に深く影を落としていた武田信玄の功績史観からの克服がアカデミックな課題であった。しかし、そのことは武田時代と江戸時代の関連を絶つのではなく、武田時代とのつながりを正しく突き止めることをすすめなければならぬ、そこに事実が見え江戸時代の社会が理解できる」という視座がこれまででは欠け、それまでの史観を地元研究者を含めて認知してきってしまった経緯がある。その反省の上に立ち、著者は事実関係の洗い直しによって地域社会が育んだ歴史にメスを入れ、新知見を引き出している。

そのような問題関心から、本書は近世甲斐の治水と開発を全時代的に扱ったものではなく、武田時代から江戸時代への連続性の問題が主要なテーマとなっている。そこで、まず本書の章別構成を次に記し、その概要を紹介することにしよう。

序文

第一編 信玄堤と治水の発展

釜無川治水の発展過程(一)

釜無川治水の発展過程(二)

初期「信玄堤」の形態について―最近の安芸・古島説をめぐって―

甲斐における治水体制の一考察―武田時代から近世前期への推移―

近世甲斐における川除郡中割金制度

「川除口伝書」にみる甲州流治水工夫

第二編 国中地方の開発と土地生産力

甲州における石見検地の石盛について

近世前期甲斐における農業の展開―国中地方の開発の進展傾向―

慶長検地帳にみる国中地方の耕地状況

近世前期甲州国中地方の土地生産力

第三編 小切税法と口米制度

甲斐における口米制度の成立について

甲斐の公納口米・三升口米について

甲斐における小切税法成立の一考察

甲州における俵人数値の検討

このように、全体は三編から構成され、すでに発表された一四論文を所収している。第一編では、まず武田時代以前に甲府盆地を乱流していた釜無川に着目し、現在より東側の中巨摩郡竜王町から甲府市上石田に回り込んで弧を描くように流れていたことを、古文書に記載された地名や地形調査の成果によって論証し、治水史の足跡を追っている。第三項の「信玄堤」の研究は、古島敏雄・安芸皎一両氏の相異なる見解の再検討を通して、新たな築堤段階を提起し、初期「信玄堤」の原基形態を推察し、その他の論考も含めて治水技術の発展過程を位置づけながら、江戸中期以

降にみられた幕府の治水政策の転換が近代の大水害後の治水の出发点になったことを論じている。これは従来の郷土史が信玄治水から一足跳びに近代の治水に目を向けてしまう歴史の有り様に一石を投じるもので、地元との関わりなくして浮かび上がらない課題であろうし、解き明かせない問題でもあろう。そうした問題の立て方は、第五項の川除郡中割金制度の解明でいよいよ発揮されている。つまり、この制度による領民負担が近世の治水工事を根本から支えていたことを語り継いでいない反省の上に立ち、近世の体系化した治水政策を領国的規模で支えたのは治水費の郡中割金による村役負担であったことを指摘している。

第二編では治水の歴史とともにある開発と生産力の地域的特性を説明することに主眼が置かれている。つまり、治水事業の地域的基盤となる基礎構造の検証である。そこでまず近世初期の検地帳の分析を通して、他国に比較して高く設定された石盛の位置づけを試み、そこから土地生産力の地域性を究明し、開発や耕地の様子を探り当てている。この結果、甲府盆地を取り巻く耕地は盆地の低地部、その周辺部、さらに山間部と大きく三つに区分できること、また地理地形による地域差のあることなどが論証され、甲州の土地の特殊慣行が裏付けられているのである。ここでは検地帳や村高帳の分析が、当時の農業生産や地域的特性を浮き彫りにするのに有効に活用され、江戸初期の耕地や農業生産力の実相に鋭く迫る手法が示された点で興味深い。

第三編は甲斐国の年貢制度の特質究明にあたり、四つの論文が収録されている。まずその一つは一説に信玄以来の遺風とされる

口米制度について、『甲斐国志』にある徳川家康再領の際の施策とする説を妥当として、初一俵甲州升二斗二升に一升の口稻を納めたのが、その後の本途小物成米に二十二分の一の口米を納める制度となったことを検証している。また幕府の規定より多量の口米を納めるために分けられたとされる公納口米・三升口米というのが、代官所給付が停止されて一般の年貢米の一環として納入されるようになってから、しだいに区分が明確になり、納め方が固定化していくことを明らかにし、これまでなおざりにされてきた年貢制度の一つに新知見を提示している。同様に、武田時代の遺制と伝えられる小切税法の成立過程を検討し、この税法の史料的上限を慶長期とし、もともと適用範囲が限られていたものがしだいに拡大されていったことが史料的に裏付けられている。さらにこれまでの甲州における俵入数値研究の成果を再検討した結果、甲州の一俵は初にして甲州升二斗、京升では六斗、そして玄米に六合摺りで甲州升一斗二升、京升では三斗六升の数値が武田時代から江戸期にかけて用いられていたことが明らかにされている。

このように、著者は近世甲斐地域史研究で不問にされてきた歴史的事象に深くメスを入れ、実証的に論証しようとする姿勢が一貫している。その結果、新しい事実関係が浮かび上がってきた。これまで築き上げられてきた研究成果をもう一度問い直して再び構築する手法は非常に時間がかかるものである。それにひたむきに取り組んだのは地域をこよなく愛する者のみがなしえる技なのであろう。心よりその労に敬意を表したい。しかし、著者自ら述

べているように、論証の行き届かなかった点もいくつかある。またここで明らかにされた事実関係が幕藩制社会のなかにどのよう位置づけられるのかも残された課題であろう。おそらく著者のことであるから、これらの課題はまもなく解き明かしてくれることだろう。いずれにしても、本書が近世甲斐地域史研究に一石を投ずるものであることは確かである。

（一九九三年十二月刊 A5判 二七二頁 三五〇〇円 山梨日日新聞社）

佐藤久夫著

『日光 江戸近郊の宿駅と文化』

道中

大村 進

日光道中草加・越谷地域は、現在の埼玉県東部低地に位置し、県内を南北・西東に流れる古利根・元荒川水系の諸河川が複雑に流路を変え、それら諸河川の乱流により形成された大小の沼が散在する低湿地であった。ここには南の千住辺にかけて南北の帯状の微高地が発達しており、その微高地上に集落や田畑が展開し、それを結んで街道が開け、集落を連合して宿駅が成立していた。この地は『新編武蔵風土記稿』に、「もとより土地低きうえに、綾瀬川に添い……悪水堀ありて、水溢るれば甚水災に苦しむ」「水損場なれども、又旱魃をも患ふる」文字どおり河と戦う地域であった。

このためか、当地域は度々の水害による文書・記録類の流失で、史料の少ない所とされ、地方史研究の空白地と目されていた。ところが、昭和四〇年代前半頃より越谷市を皮切として岩槻・春日部・草加・八潮の各市で市史編纂事業が開始されるに及んで大量の史料発掘がみられ、かつ調査研究の成果が蓄積されて、その面目を一新するに至った。とりわけこの地域の特徴を示す「河川と交通」の問題は、河川が画する武蔵国境が内包する政治・経済・文化の諸問題と絡めて、多数の研究者の関心を集める所となり、一九九二年に地方史研究協議会が「河川——境界と交流」を大会テーマに取り上げ、草加市を会場として開催したのもその表れである。そしてそれが当地の研究者を刺激し、その後中川を考察の中心とする研究会も開催されている。しかし、史料の偏在と地元研究者の少なさは、依然としてこの地の研究の困難さを示し、研究はやつと緒についたというのが実情である。

こうした状況下にある草加・越谷地域を対象地として、佐藤氏が長年蓄積された研究成果を一本にまとめて、本書を上梓されたことは、当地の地域史研究推進に大きな刺激を与えると共に、著者の手堅い実証研究から紡ぎ出された成果が、今後のこの地の研究に確実な拠り所を提供してくれるといえよう。

著者の研究態度と本書の内容及び価値について、序文を寄せられた村上先生は「佐藤さんの調査研究は、史料に基づき実証的に解明していく手堅い手法であり……各論文の内容は、いずれも地域に対する関心を強く呼び起こしてくれるものばかりであり、地域の人々の生活や文化・教育がさまざまな形によって展開されて

いることを、それぞれの角度から解明されようとしている。この点からも本書は地域史として欠くことのできない重要文献」であると評されている。

このことは歴史研究法として当然のことといえればそれまでであるが、これは言うは易くして行うは難いことで、我々が日頃痛感しているところである。ところが著者は、長期にわたって関連史料の博搜・選択・批判、史実の厳密な解釈等の基本を忠実に守り、実践してきたのである。その具体例は本書の随所に見られる。

著者がフィールドとされた草加・越谷地域は、近世の政治・経済・文化の中心地である江戸の地廻圈に属し、江戸と地方との結節点を占める地で、近世の歴史的展開を如実に示す格好の研究地である。それにも増して注目されるのは、この地が著者の五〇年に及ぶ生活の根拠地であり、朝な夕な著者はこの地に親しみ生業に励み、かつ歴史や文化財に対する問題意識をかきたたせ、かつ究明に当たってきた所であった。そうした郷土に対する愛情と情報の知悉が研究の根幹となっており、それが論稿の各所に滲み出ているのである。

本書の構成は、概要編と研究編とから成る。概要編は氏がかねて問題意識をもってきた草加・越谷宿を中心にして日光道中における近世初頭の伝馬制の成立について見通しをつける意味で近世宿駅制度を概観し、本書理解の基礎として新たに書き起こされたものである。言い換えれば後掲の研究編の導かないし平易な総括部ともいえよう。

内容は、江戸初期以来曖昧多岐に呼ばれていた日光道中の呼称と、五街道や日光道中の成立期の問題を初めとして、宿駅と伝馬制、継立人馬と賃錢、助郷制と宿経営、江戸の伝馬・荷駄扱い、伝馬制度の終焉と近代化まで、六節にわたり日光道中の草加・越谷宿を中心とする近世宿駅制度の概説史となっている。従って本稿によって江戸近郊宿駅が負わされた歴史的役割や矛盾はほぼ理解できよう。

日光道中の研究については、日光御成道に比し多少研究は進んでいるが、日光道中全体から見ると埼玉県内部分の立遅れが指摘されている。従来の研究は越谷市史・春日部市史・草加市史、最近では幸手市史の編さん等、自治体史主導の研究であった。これらの研究は自治体行政域を主な対象地にするため全体的把握に欠ける欠陥があった。個人の成果としては越谷市史編纂に携った本間清利氏の研究（県内全体概説書としての『日光街道繁昌記』等）が目立つ程度である。しかしながら近世初頭の成立期の課題については史料の制約もあって、なお未解明の部分が多い。著者が概要編を執筆した動機もこの点にあったらしく、凡例でも「概要編は近世の宿駅を主とした。（それは）当地の未解明部分が近世初頭の伝馬制成立にあるからである」と述べ、しかも研究編の冒頭に草加組合宿組の考察を掲げているのもそのためであろう。

概要編といながら、主題ごとに関係史料を明示し、問題点を摘記し、簡潔に史料評価を加え全体に及ぼしており、読者に対し説得力のある展開となっている。

研究編は著者の多年にわたる研究活動のなかで、さまざまな研

書評と紹介

究誌（法政史学をはじめ、地方史研究・埼玉研究・埼玉地方史・越谷市史研究報告・草加市史研究・草加市史協年報等）に公表されたものから選んで、①日光道中草加宿、②綾瀬川の河岸、③采邑の系譜、④江戸近郊宿駅地の文化の四テーマに構成してある。

課題はいずれも著者の住居や奉職地内から酌み上げられ、熟知した大地に刻まれた史実を見逃すことなく把え、鋭い分析と考察によって史実に迫る優れた地域史研究者の目をもっていた。それは「首都の近郊地である……越谷に住んで五十年、草加に職を得て五十年、この間教員とし、市役所職員とし、市史編纂（市文化財保護委員）の一員として」研究を続けてきたものをまとめたとする著者自身の言葉にもよく示されている。巻末の略歴を見ると市の行政において多様多種の重職を歴任されており、自由に研究に費す時間が得られなかったことが、市史編纂事業の推進と絡めて身近な歴史的課題の解明に向かわせたのであろう。

従って本書の真骨頂は研究編にあり、その研究方法は前述したように丸山忠綱先生直伝の着実な文献実証主義の駆使にあった。①の「日光道中草加宿」は概要編の特論とでも言うべきもので、著者の最も情熱を傾けたテーマの一つであった。日光道中が中世以来の古道（奥大道など）による日光御成道より優先して、あえて低湿地である草加を通して新開発宿を置き、やがて五街道の一として整備されたことはよく知られるところであるが、それについては史料の制約上、余り言及されることはなかった。著者もその点については意識はされていたと思われるが、実証主義の立場からか手にし得る史料の吟味により、日光道中の成立と草加宿の

成立についての考察に力点を置いている。そして従来地元で有力な説とされてきた寛永七年（一六五〇）の草加宿成立説（『草加町見聞史』）を排し、慶長十一年（一六〇六）説をとっている。その妥当性は認められるものの、なお中世以来の日光御成道筋をさしおいて、千住草加ルートによる新街道開削に踏み切った伊奈氏の意図、及び組合宿駅の成立と伝馬継立の開始期の関係をどのように評価するか、興味の尽きない課題である。

次に草加宿の特徴として宿組合村の形成とその特質について述べる。多くの伝馬宿が一宿一村で成立していたのに対し、草加宿は近隣九か村で宿組を結成し、協同で宿駅経営に当たっていたのは、小高の村々の多かったことと、「一宿の運営には村高一、五〇〇石程度の力を必要とする為と推測」する。とりわけ草加宿開発名主として著明な大川図書との関わりでいえば、図書の住村宿篠葉村の村高が一八九石余しかなく、一村ではとても宿駅負担には堪えられず、止むを得ず組合構成としたと説き、草加宿の形態がほぼ整ったのは正徳期のこととしている。

草加宿の開創に当って開発名主大川図書の功績は大きく、しかも近代にいたるまで大きな影響を保持してきたことから、地元研究者をはじめ草加宿に関心を持つ人々が図書に寄せる興味には多大なものがある。著者も草加宿解明の鍵として大川家の動向ないし大川図書の出自に関心を寄せ、図書が在地有力者なるか、他郷からの転入者なるかの究明をする。その検討素材として文政八年（一八二五）三月に、兔園会で文宝堂（亀屋久右衛門）が発表した江戸のうなぎ屋「草加屋安兵衛」と徳川氏の大軍船「安宅丸御

船修造の節の漆の事」の話を取り上げ、図書の出自をめぐる広範な考察を通して、歴史の意外な結び付きを明らかにする。また、出自研究の重要史料である「大川家系図」は、大川三家（打出・中・下大川家）のうち本家筋に当る打出大川家の十一代当主大川吉英が、嘉永二年（一八四九）に著名な国学者黒川春村に依頼して作成された経緯を明らかにしている。その結果、江戸末記録による江戸初期の究明は「説話の域を出」ず、かつ、元禄以前の史実を「既成の編纂記録類から究明することの困難と危険を知った」と筆者の見識を示す。但し、従来の大川氏研究が開発名主という側面からのみの考究であったのに対し、「江戸化政文化と幕末文芸史の上において再認識する必要」を述べ、江戸近郊宿駅地の文化面での究明の価値を指摘している点は興味深い。

②の「綾瀬川の河岸」では、草加市の中央部を流れる綾瀬川の市域の河畔に、設けられていた魚屋河岸・札場河岸・藤助河岸の三河岸について、その設置の経緯と川船取締り、草加宿の本店と河岸の関係、明治・大正期の河岸における船頭と回漕店について考察されている。現在の綾瀬川は江戸時代初頭に河道替えされた新川で、新綾瀬川と称していた。近世の舟運は勿論これによっていた。河道替え以前の旧川は古綾瀬川と称し、大河で河道からの丸木舟の発掘から、古くから舟利用があったとしている。近世以降の綾瀬の舟運は幕府の統制下で、年貢積荷場として認可され、その維持も幕府財源によっていた。やがて江戸の泰平と商工業の発展は、河川や河岸の機能を江戸への物資輸送機関へと変質させ、近隣の農村や宿場にも大きな影響を与える。一方、財政の逼

迫に悩む幕府は、河川改修費等を用水組合や村へ委譲を図り、元禄・享保期には民間への財源負担が一層進められ、新たに川船・商品荷物への課税賦課が行われると共に、かつて川船統制のために打たれた極印が課税賦課の印に転換し、取締役人も幕府の旗本に代わり町人が極印改め役として抬頭してきたという。また、河川管理費の民間化は、舟運業者と単に用排水利用の農民との間に受益の差をめぐって新たな対立抗争を生じた。

一方、宿駅との関係においては元禄以降の交通増大によって伝馬屋敷への負担が増大し、享保以降退転百姓の増加したことを説く。また百姓渡世の伝馬屋敷は公用旅客から収入の多い私的旅行者を対象として旅籠に転換し宿は賑う。このため経済活動は活発化し金融・質業を発達させ、農民層の分解による質地の増大は質業者を大きく成長させた。こうした状況下で大店が成立し、彼らは商品輸送を舟運に頼り、河岸を中心に物流の活発化した状況を明らかにしている。

近代に入ると陸上交通機関の発達により、大正末年には綾瀬川の河岸や回漕店は閉鎖され、最後まで残った下肥船も、化学肥料の普及によってその役割を失った。草加宿の商工業宿場経営を支えたものは、綾瀬川とその舟運にあったという。

本稿で目を引くのは「武蔵の人強頸——治水考——」である。仁徳紀に見える茨田堤の築堤に当った武蔵人強頸を素材として、難波開発と治水について綾瀬低地の泥川普請との関連を述べている。難波を典型的な泥川低湿地湖沼地帯と押え、この難波と同様の自然条件を持った地を、淀川下流低地帯と利根・荒川下流地帯

に求め、難波開発の巧者として前者から河内杉子、後者から武蔵強頸を挙げたとする。仁徳紀に見える茨田堤の二か所の断間工事の伝承について、筆者は普請工法の差違という点から、強頸の入水を入柱と解してきた従前の考え方を脱し、それを杭と解して杭打は竹・木材等を川床に打ちこむ堤塘・坎堰の護岸手法——即ち泥川普請の基本工法である杭打工法とみる。それに対し杉子の採った「瓠（ひさご・ひょうたん）」の投げ入れは、ひょうたんを入れ物——土俵・土簀等と仮定し、技法を土俵・土簀等の「こも積み」工法と解する。茨田堤の泥川治水普請には「杭打」と「土俵」の二つの基本工法が行われ、強頸が泣き悲しんで水没したのは技術の優劣を示すのでなく、両者の大和朝廷に対する政治的優劣を示すものとし、さらに古代の武蔵には治水技能者が既に存在していて、その指導者は帰化人（渡来人）だと推察する。

最後に綾瀬川への悪水吐口模様替え一件（出入）を掲げ、まとめとしている。

③の「采邑の系譜」は、「各村を支配した領主・地頭等が意外に不明瞭であり、また誤り伝えられているものが多い」こと、その一因は近世初頭の事象であっても「新編武蔵風土記稿」や『寛政重修諸家譜』等幕末記録に安易に頼りすぎて来たことによる」反省もこめて、従来漠然と捉えられてきた支配関係を見直し、「一見一律に見える草加市域の支配と村人の関係も、江戸幕府の支配の形と支配者によって、被支配の村人の生活、庶民意識に差異が生じている」という見通しにたつて執筆されたものである。全体は七節から成るが、その主なものは代官・関東郡代とし

て知られる伊奈氏一族の私領・賜録（職制上支配した公料所は除く）を、家別年次系統に整理したもの、青柳村を相給知行した江戸大奥の医師塙宗悦家と奈須玄竹家の研究——両者は旗本とはいえ刀を持たない奥医師で、一般旗本とは同一に論じられない困難性を持つ領主として取り上げたもの、柿木村の幕藩支配、とりわけ八か村が忍藩領支配地であったため、その領主支配の特性を究明したもの、御料私領三分入会支配地青柳村の例から、『新編武蔵風土記稿』の記述にある「正保の頃村内をさきて松平伊豆守に賜はりしが」を、他の史料の考証から信が置けないとする研究等である。そのいずれもが、前述のように後年成立史料の安易な信頼と通説の無批判の理解を戒めるもので、原点に立つ基礎作業の重要性を指摘するものであった。

④の「江戸近郊宿駅地の文化」は、著者が大学院時代から研究を進めてきたテーマを含んでいる。その点でかつて著者からしばしば名前を聞かされていた文人が登場し、筆者としても懐かしいものがある。まず最初に草加・越谷地域は江戸近郊宿駅地であり、かつ河川交通の発達によって河岸と大店の成立により、宿駅豪民による江戸との深い結びつきがみられ、一部は江戸に出て文化的活動をしたものもあったという。そのなかで近世後期文化史上、一応の評価をうけた者（在地への文化的影響は少ないが）として、渡辺荒陽・村田多勢子・越谷吾山・伊沢信階の四人を挙げ紹介している。これに対し中央での知名度は劣るが、直接・間接に郷土の文化・教育に寄与した者として小沢豊功・小堤春盟・山崎篤利他を挙げ、また、当地の出身者ではないが、江戸近郊とい

うことで当地へ訪れ、影響を及ぼした者として平田篤胤・龜田鵬斎・芸道家の谷文晁・小泉栄泉の活動を紹介している。こうした文化人の出現ないし来訪は、「宝暦・明和からの豪農層の学者化への傾向、化政期の有力商人層の学問・文芸への憧憬、嘉永・安政期から商家子弟の寺子入門の急増という、極めて急速な文化変貌」にあり、その変貌要因は「宿駅設置によってもたらされたもの」としている。

「伊吹舍学と草莽門人——山崎篤利を中心に見たる——」は著者の修論の一部であるが、「法政史学」第十七号に掲載されているので、ここでは繰返さない。ただ「埼玉県における平田国学門人の滲透」には、幕末維新にかけて大きな意義をもつ平田神道の国学について、個人的門人活動や一地域の意義を越えて、県全体の視野で平田学の拡大発展過程を探り、その影響や意義を考察する基礎資料として、平田門人の入門年月・地域・系統を網羅して表化しており、その努力に敬服すると共に、県内平田学研究に与える影響には大きいものがある。

さらに越谷市山崎家蔵の平田家書簡の紹介と、平田・山崎両家の関係年表を掲げ、最後に近世庶民児童教育の場として草加宿奥家の寺子屋に視点をあて、草加の近代学校教育への系譜を探っている。巻末には「日光道中 江戸近郊宿駅地の略年表」を付し、読者の便を図っている。

以上、雑駁ながら畏友佐藤氏の御著の紹介につとめた。何分筆者は近世の理解に乏しく土地勘もないので、著者の論稿の意図を十分に伝え得たか否か甚だ心許ない。なかには不適切な評言もあ

ろうかと思われるが、お許しいただき紹介に代えたい。

〔一九九三年刊 B5判 七一〇頁 自費出版〕

片桐一男著

『阿蘭陀通詞今村源右衛門英生』

外^とつ^に国の言葉をわがものとして

安岡 昭男

新井白石の『西洋紀聞』に通詞として名を留めているのが、潜入イタリア人宣教師シドッチ^{きどっち}訳問の通訳を務めた今村源右衛門英生（二六七―一七三六）である。本書の「参考文献 最初に挙げているが、今村明恒^{あきひさ}著『蘭学の祖今村英生』（朝日新選書）が一九四二（昭和十七）年に出ている。著者は英生の子孫で、関東大震災の前に「地震近し」と警告した地震学者として知られるが、「英生畢生の功績として伝ふべきは、一はシドッチの通訳であり、他は蘭書翻訳に先鞭をつけたことであらう」と述べていた。『贈位諸賢伝』（大正十三年、贈正五位）はシドッチ通訳のほか、オランダ馬術家ケーズル乗馬の將軍吉宗上覧にも通弁を務め厚賜ありとしている。

片桐一男氏（青山学院大学教授、蘭学史）新著の特筆すべきは（一）『日本誌』で有名なケンペルの助手を今村が勤めたのを明確にした、（二）シドッチ尋問「二十四箇条」を見出して、シドッチ答弁の口書十四箇条と比較を試みた、の二点にある。

第一章で「阿蘭陀通詞の組織と職務」を略説して（詳細は別著

書評と紹介

『阿蘭陀通詞の研究』に譲り）、第二章「ケンペルの助手、今村源右衛門」ではケンペルがオランダ語を教え、情報・資料の収集、調査研究の助手としながら敢えて名を出さなかった有能な日本人青年が誰であるか、近年まで不明であったのを今村であると確定している。一九九〇（平成二）年「ドイツ人の見た元禄時代ケンペル展」（サントリー美術館）で大英図書館出陳の資料「請状之夏」を著者が解読した結果判明したものである。この史料は肖像、「異国人江可相尋事」（二十四箇条）、「外国之事調書」と共に口絵写真にある。

第三章は「阿蘭陀通詞今村家の誕生」、第四章が「シドッチ尋問と今村源右衛門」で、宮崎道生「新井白石の洋学と海外知識」など参照の上、ラテン語まで学習し通弁に全力を尽くした苦心を跡づける。とくに通詞中山家の資料（長崎市、シーボルト記念館蔵）から見出した尋問「二十四箇条」を、シドッチの答弁である異国人口書「十四箇条」と比較対照し検討を加え、順序不一致をはじめ機密にわたる内容に関しても解明を進めている。

第五章「御用方通詞 今村源右衛門英生」では將軍徳川吉宗の御用方を勤め、洋馬の注文、馬術師ケイゼルよりの聴取・訳出、江戸出府への付添いから、ケイゼル携帯のクルールの馬療書の邦訳（『西説伯楽必携』）などに及び、今村の語学力と学識の大きさを「立派に蘭学者と呼び得る大通詞であった」と評価する。今村市兵衛編訳「西説伯楽必携」は前記「蘭学の祖今村英生」に「日記抄」「紅毛尺」「和蘭問答」と共に収録、また岩生成一著、日蘭学会編「明治以前洋馬の輸入と増殖」（一九八〇年）にも諸写本と

校合し付録史料として紹介されている（市兵衛は英生の改名）。

第六章は晩年の今村を描く。通詞として最高の通詞目附に就任したのが五八歳、翌年ケイゼル御用を命ぜられた。ケイゼルが帰途船中で殺され下賜品を奪われた事実は『徳川実紀』の記載を引いている。最後に、寛文・延宝・天和・貞享・元禄・宝永・正徳・享保・元文と生きた今村の人物評価にかえて、二十項にわたり「まとめ」で結んでおり、今村家の略系図と由緒書、源右衛門の略年譜を付す。

今村の後進になるのが英才を並び称されてよい通詞・洋学者、馬場佐十郎（一七八七―一八二三）についても著者の論考がある（法政史学2122、青山史学5）。伝記書のない馬場に比べ、子孫明恒によるものに加え、好個の專著を得た今村は幸いというべきであろう。

（一九九五年一月刊 新書判 二七六頁 七〇〇円 丸善ライブラリー145）

【會員編著書抄】

井原政純著 多賀出版 平成六

『社会・地歴・公民科基礎論』

倉持俊一共編 山川出版社 平成六

『ロシア史』第二卷（世界歴史大系）

斎藤富一著 近代文芸社 平成六

『東海道保土谷宿の飯盛女』

谷口研語著 中央公論社 平成六

『流浪の戦国貴族近衛前久』（中公新書）

中野栄夫著 名著出版 平成六

『コンピュータ歴史学のすすめ』

長井純市編 山川出版社 平成六

『渡辺千秋関係文書』

湯本豪一編 日外アソシエーツ 平成六

『美術館博物館は「いま」』

湯本豪一共著 丸善 平成六

『外国漫画に描かれた日本』

湯本豪一共著 文芸春秋 平成六

『漫画と小説のはざま 近代漫画の父・岡本一平』

片桐一男著 丸善出版事業部 平成七

『今村源右衛門』（丸善ライブラリー）

白川部達夫著 校倉書房 平成七

『日本近世の村と百姓の世界』

丸善出版事業部 校倉書房 平成七